

岩野泡鳴における

シャルル・ボードレールの影響

——「発展」の中の詩を中心として——

赤 瀬 雅 子

ボードレールを評して「形而上学的腐敗，純粹智性の罪惡，墮落天使の地獄に於ける罪」^(註1)と喝破した泡鳴は，「ボードレル以後」^(註2)のディアボリシズムを真に担い得るのは自分であると信じていた。「僕の刹那主義」^(註3)の源は，「惡魔主義大本尊ボードレル」^(註4)なのである。前回「惡魔主義の思想と文芸」と題する，彼の生涯においてものしたうちでも，最も大切な数篇のうちに入れるべき論文を取り上げたが，今回は，五部作と総称される数篇の小説作品の連作の中にみられるディアボリシズムを，主として「発展」の中に散見する詩を取り上げて，跡づけてみたい。

煩惱即菩提とは，俗曲にまでも乱用してあつて，仏家でさへもう古臭いやうに思つて居よう，然し，この大宇宙のうちに，一つとして全く新しいと云はれるものがあらうか，どうか。歴史といふ棺桶を一度でもこぐらないものがあらうか，どうか。若しあるとすれば，それは，神も知らない，人間も知らない，また棒振りも，アミーバも，最小原子も知らなかつた世界が，別に何物かに依つて作られた時であらう。暗く光る琵琶湖のおもてを渡つて，今撞き出した三井寺の鐘が響くのは，歴史から云ふと，もう，何世紀も以前の地獄で，一たび魔鬼のこころを驚かした声である。然し，僕等の靈がその声を聴いて，一刹那の表象に目が覚めた時は，肉即靈の新天地を活現するのである。たとえば，恋の場合に於て，人目の関はうるさい，友人の嫉妬は面白

い、両親の干渉は面倒だ、手を握り合ふのは嬉しい、子供の出来るのは心配だ、然し、かう云ふことを考へて居る間は、若し霊肉の人格なるものがあるとするば、その人格が前後左右の空氣に散乱して居るのであつて、まだ一刹那の活世界を現じ得ないのである。男女が相抱擁する時の様な熱愛は、到底、道学者輩の敬愛や、親愛や、友愛などと同一視すべきものでない。仮りに嬉しみを肉とし、悲しみを霊と見れば、この両者が白熱の勢ひを以つて活動融化するのであるから、悲喜相離すべからざる新境地が出来るのである。(註5)

「悪魔主義の思想と文芸」を公にするより九年以前、泡鳴は上に挙げたような、「神秘的半獣主義」と名付けた論文をあらわした。もちろんこの論文については、スウェーデンボルグ、エマーソン、メーテルリンクの影響を考察せねばならぬが、これは他日に譲るとして、とも角、泡鳴は、霊と肉の両者の、「悲喜相離すべからざる新境地」を目指していた。これはその創作活動においてのみではなく、カラフトに渡って試みた実業においても、また一時期には連日のように新聞の社会面を賑わせ、人々には性懲りもない醜聞と受け取られた恋愛においても同様であった。彼の志した、カラフトにおける蟹の缶詰製造の事業は、二葉亭四迷が目論んだ実業とは本質的に異なるものである。あたかもこの両者の志した、文学とは無縁の事業が、一見同質のものに見えるのは、両者とも、実業人の目から見れば、甚だ心許ない、成功のおぼつかないものであった点が共通であるからに過ぎないであろう。二葉亭四迷の場合には、あくまでも日本という国家の発展が目的であり、事業は、そのための手段である。(註6) 泡鳴の場合には、事業は自我を発展させるという至高の目的の手段であった。そこには「悲痛の哲理」に基いて、最初から苦痛と悲哀とが泡鳴自身によって予想されたものであり、また、そうであらねばならなかったのである。妻の営む下宿屋からのささやかな収入は、泡鳴一家の生計を支える大切なものであったが、彼はその金をも缶詰事業に投じ、「千代子も死ね、お鳥も死ね、入院してゐる二名の子も死ね、さうしたら、最も冷たい雪や氷の中へでも、自由自在

に自分の事業をして行けると。) (「毒薬を飲む女」) (註7) 思い、「義雄が多年生活に疲れ、奔走に疲れ、放浪に疲れ、生の苦しみ——それが生命であった——を味はって来た今、」 (「発展」) ふと死の影を垣間見ても、悲痛すなわち歓喜、悲痛すなわち生命という考えを悔いはしないのである。彼の事業とはこのような考えの具現に過ぎず、彼がカラフトでの缶詰製造事業に失敗して北海道を放浪し、事業家としてではなく、東京のかなり名の売れた文士として、北海道の狭いジャーナリズムの世界に受けることも、その悲壮感によって、それはそれなりに彼の満足できる世界であった。

恋愛に言及してみると、明治28年、彼が22歳の時、浜田藩の家老の息女で小学校教員であった、三歳年長の竹腰幸を知り、妻にと望んだが、彼の家は蜂須賀家の家臣であったため竹腰家はこれを許さなかった。彼は幸を略奪し、人力車に乗せて西久保の親の家に運び、同棲する。(註8) 明治39年、「神秘的半獣主義」を出版した年の夏は、日光に遊び、「耽溺」の女主人公のモデルとなった女性と共に過す。これは色が黒いので、おからす芸者という仇名を持つ下級の芸妓であったが、泡鳴は彼女を女優に仕立てようと夢みる。明治41年、35歳の年には詩集「闇の盃盤」、評論集「新自然主義」が出版され、文筆に油の乗った年であったが、彼の妻の経営する下宿の下宿人増田しも江を知り、彼女を芝切通広町に囲った。彼女は清水お鳥のモデルである。泡鳴は、紀州の田舎から出て来たこのしも江をも、女優にしようと試みる。彼女はいわゆる出戻りの、粗野な女であるが、純なところもある。明治42年、下宿屋をも抵当に入れ、慶応の大学生であった弟を中退させてまで試みた北海道の蟹の缶詰事業が失敗に終る。しかし樺太庁の役人の視察に随行して露館までも踏査したこの年、地元のジャーナリストたちと薄野に赴き、遊女敷島と親しみ、本も周囲にない放浪のわが身を考える。

ここにはプラトーンはない、イマニユエルカントはない。スキデンボルグはない、エマソンはない。渠等はすべて渠の古い感化者である。して今では渠

の思想上に於ける敵である。渠は渠等をそばに控へて、その向ふを張るのを正直な誇りとしてゐるのだ。渠等のないのは、渠に取つて、何だか心寂しい様だ。

然し、その代り、反対的にでもカントやエマソンをそばに控へない放浪の身でありながら、今持つてゐる思想をまとめ得られるのは、自分の精神と神経とに独創のセンチメント、情熱が出来てゐるからであると、身づから心丈夫に思ふ。

『自分の悲痛な思索は自分の直接経験だ。』かう思ふと、自分のこれまでに経て来た幾多の恋、信仰、詩人的努力、家庭の迫害、親不孝、妻子を虐待、友人の離散、失恋、懷疑、絶望、破壊、墮落、自殺未遂、恋愛的事業、生の自覚、悲哀苦痛の現実的体得など、それからそれへと変転骨脱して来た間にも、自分は終始一貫してゐるのを、自分ながら痛切に感じた。

して、筆などを以つてまどろっこしい論戦をするよりも、寧ろ自分その物を今のまま論敵の前へほうり出した方が手速い証明だと考へる。

五部作のうち、発表当時、褒貶相半ばし、最も評判になった「放浪」の中のこの述懐には、彼の面目躍如たるものがあると言えよう。

一方、増田しも江は、生活に行き詰ったことと泡鳴を慕う気持の二つから渡道して来たが、彼はこの年の暮には、妻ともしも江とも別れ、婦人運動家の遠藤清子と西大久保で同棲する。遠藤清子は非常に演説の上手い、時代の先頭を切る女性であった。清子については、こんな挿話がある。彼女は実はこのころ泡鳴にはじめて会ったものではなく、泡鳴が二十歳前後の青年であったとき、出会ったことがあった。泡鳴の悪友たちの間では、当時、街頭で出会う見知らぬ婦人の手をいきなり取り、その驚く様子を見て楽しむ悪戯が流行したが、ある日彼がこの悪戯を試みた婦人は、離して下さい、私はこれからすぐに議会に行かなければならないのですと叫んだ。この婦人が清子であったことが十数年の後に判明したわけである。この事件は、新聞の社会面を賑わせ、前年に発表

された彼の論文、「靈肉合致の事実」、「靈肉合致——自我独存」をもじって、靈が勝つか、肉が勝つかなどという、揶揄的な記事にされたりした。

大正四年には青踏社の一員で、泡鳴の「プルターク英雄伝」翻訳という仕事の助手であった蒲原英枝と同棲し、『国民新聞』紙上において非難された。彼は桑木厳翼、井上哲次部らに駁論して「男女と貞操問題」を出版した。また清子の同居請求の訴訟に反訴し、泡鳴を病的な人間とみなした浮田和民をも訴えた。しかし、これらはいずれも、泡鳴の敗訴に終わったのである。

彼の事業と恋愛の経過を追って行くと、ほぼ以上のような輪郭が浮び上るわけであるが、五部作は、いずれもこの線の上に載せるべきものである。

五部作は、事件の推移、泡鳴の現実の生活の経過からみると、「発展」、「毒薬を飲む女」、「放浪」、「断橋」、「憑き物」となる。

しかし「発展」の「はしがき」によれば、「この著『発展』は僕の五部作の一である。事件聯絡の順序から云へば、第一は『耽溺』第二は『発展』第三は未だ発表せず、第四は『放浪』第五は『断橋』だ。」とある。約10年の歳月を経るうちにこの意図は多少変更され、内容にも改変が加えられた。「耽溺」は五部作の中には加えられてはいない。発表順序は「放浪」(註9)、「断橋」(註10)、「発展」(註11)「毒薬を飲む女」(註12)、「憑き物」(註13)である。

先ず前述のように、現実に泡鳴の身の上に起った事件としては第一番目にあたる、「発展」を取り上げてみる。

明治41年、泡鳴35歳の年の5月、維新後は洲本において巡査を務め、次いで皇宮警務官となり、泡鳴が仙台の神学校に赴く前年(明治23年)から、西久保八幡町の埋め立て地に「日の出館」という下宿屋を建て、これを経営していた父、直夫が亡くなった。長男である泡鳴は家督を相続したが、経営は専ら妻幸に任せて、大倉商業学校で教鞭を取る以外の時間はすべて、文学研究に没頭する。朝早くから学校に出ないでよい時には、徹夜かそれに近い状態で勉強をし、一度目を通した書物には、赤鉛筆や「紫鉛筆」で線を引き、「おれの妻子は書物と原稿だ。」と称している。家庭には書物があるので、虫の好かない妻

子がいても、とも角落ち付けるというのである。このような偏屈な書齋人であった彼は、紀州から出て来た下宿人の若い女に興味を抱くようになる。彼女は清水鳥という、故郷で小学校の教員をしていたこともあるが、花街の迷信なども識っており、いわゆる渡り者めいたところのある女である。

彼はお鳥と親しんで衰えかけた創作欲を刺戟し、またお鳥をも、大でこでの廂髪に結った田舎出のハイカラな女から、多少とも話相手になれるような女性に育て上げて行こうと考える。彼は仕事を持って、お鳥とともに塩山温泉に避暑に行く。しかし甲州一帯は雨続きで、山津浪が来るかもしれないという噂がしきりである。あてにしていた原稿料は、本を出せば必ず発売禁止だろうというところから、送られて来ない。宿の帳場からは勘定を催促される。僅かの稿料が届くとすぐ、お鳥は帰京する。甲州には秋の訪れが早く、早くも、田の面を流る風が冷気を帯びるようになる。

闇の中を見入つてみると、末も分らない今も分らない一条の黒い道を、黒い影、喪服を着て通る影、無言（渠は半つんぽだ）沈黙（渠は物を云いたくない）、悲痛、苦悶、死などの霊がうつ向いたまま、しくしく泣いて通つて行く。

義雄は考へた——よくよく寂しいと云ふことを覚へたのであらう、誰も相手にするものがない。渠等とても、その前世では世の人々の為に絶叫し、柘榴の明いた口の如くその意見も吐露し、最も武勇な戦士の如くその議論も戦はしたのだが、相手が物が分らないので根気負をして、喪服を届けたのだらうと。この心持ちは、先輩もない、後輩もない、身一つの渠自身にはよく分つた。

それがまた一人減り、二人減り、三人四人減り、黒い道の黒い影は、草葉の露が朝日に当つたやう、みんな無くなつてしまつた。

では、もとの通り目に見えない黒光かと云ふと、さうでもない。死と云ふものが渠等をすべて呑み下し、一度生れた児をまた呑んでしまう鬼子母神の腹のやうに、秘んでゐた死の影が段々と大きく脹れて来て、渠の心の闇と合し

た。

『あ、その闇は僕自身だ。』と渠が気づくと、真ッ暗な死は矢ッ張り恋だ。鳥ちやんの亡くなる時だと思はれて、それがあまいやうな味を渠のからだ中に伝へた。『僕はあれの死ぬまであれを愛してゐたやうな気がする。』

こんなことを考えながら、泡鳴は創作をし、また一方では著書の出版、原稿料、彼女にたいする疑い、宿屋の冷遇などのことを一緒くたに考える。そして、「持ち前の執着癖を詩の世界にでも向ける外仕方がな」く、次のような詩を創る。

今迄晴れてゐた空が午後から曇つて
富士の方面から段々の大風雨
雨はちぎつて投げる様——おほ神鳴りも聴える。
急がしい雨足は四方の山々を閉す
宿の女中共はまだ時でもないのに雨戸を締める。
昼間を殆ど真ッ暗な闇
之を時々破るのは大稲妻の屈折——
ぴかり、ぴかり。／＼
また、ぴかり、ぴかり。／＼
その明滅の間にしか
万物と僕等との生命はなかつた
然し恋の続く如くこの嵐も続いて
本統の夜になつた時は、まこと僕等の世界だ。
嵐は二人の枕元は響いて
物凄い奈落の眠り（これが恋の心だ）を實現した
宇宙万物を無にした妖女は鳥ちやんだ。
影も形もない肉のあつたか味、

之を抱擁する心には底がない。

もとより「発展」は創作であるから、この詩は温泉宿で、宿賃のこと、稿料のこと、お鳥のこと、出水のことなど、様々の雑念を抱きながら、ふと口ずさまれたもののようを書いてあるが、これは虚構であろう。「本統の夜になつた時は、まこと僕等の世界だ。」から「之を抱擁する心には底がない。」までの最後の6行の詩句は、第4詩集『闇の盃盤』の中の代表作「闇の盃盤」の、「闇の盃盤、闇を超へて、我は底なき、淵に沈む」という、冒頭の詩句を思い起させる。闇黒は泡鳴の好むところであり、他の詩集、例えば第3詩集「悲恋悲歌」などにおいても、好んで取り扱われている。(註14)

また、清水鳥のモデルとなった増田しも江をうたった詩、「無言妖女」が、『闇の盃盤』の補遺とされていることも、前述のお鳥をうたった詩及び「無言妖女」と『闇の盃盤』との血縁関係を匂わせるものであろう。(註15)

「無言妖女」は、次のようなものである。

夢の あや絹、裾の さばき、
枕もとなる 人の けはひ、
優に あたかき かをり——誰ぞや、
かろく わが身の 胸に やさ手。

声も顫えて、『君よ、暁の
鐘は 鳴りぬ』と 青き 糸がほ。
ゆるむ 節々答へ 得せず、
おもき かしら に またも ねむり。

あはれ、もも度、ももの 恋の
甘き 口づけ 得なば、ここに、

死をも 招きて 死にも 受けん。

春の あかつき、床の ぬくみ、
抜けて うれひ に 醒めん よりも、
とはに いだかん 無言妖女。

同時代の詩人たちの中で、泡鳴ほど闇、暗黒、夜などの語彙を好んで使用した詩人はいない。あらゆる文芸思潮が一度に押し寄せた当時の日本の詩壇あるいは文壇の中であって、とも角自称、哲学者であり、思想家であり、詩人であるとするのを、客観的に肯定させ得る文学者は、他に見当らない。表象主義の中でも特にボードレールを第一人者とし、ポーとボードレールを結ぶ線を最も重要な文芸思潮の流れと見なした泡鳴こそ、同時代の詩人たちの中で、思想的には、最も抜ん出た存在ということができると思われる。

「発展」の主人公、田村義雄が公にしたことになっている「デカダン論」という著書は、「現今の宗教、政治、教育等の俗習見に反対したのが、学校の幹部の問題になつてゐた。」ものであるが、この架空の書物の内容は、これが実在のものであると仮定すれば、当然、「悪魔主義本尊ボードレル」を至上のデカダンとしたものであろう。彼は塩山にもアブサントを持ち込んで、それを飲みながら創作をする。「一般道徳に反いた女」と共にいて宿賃にもことかくこの頽廃派を気取る作家の外面の陽気さ、世間一般の人々やジャーナリズムに素手で立ち向う果敢さに比べ、その内面は、何と暗澹たるものであったろうか。

先に挙げた「発展」の中の無題の詩、及びこれと関連の深い「無言妖女」と比較するいみにおいて、次はボードレールの詩集『悪の華』の中の『禁断詩篇』六篇中の一編、“Les Métamorphoses du Vampire.” を取り上げてみる。

La femme cependant, de sa bouche de fraise,
En se tordant ainsi qu' un serpent sur la braise,

Et pétrissant ses seins sur le fer de son busc,
Laisait couler ces mots tout imprégnés de musc :
— «Moi, j'ai la lèvre humide, et je sais la science.
De perdre au fond d'un lit l'antique conscience.
Je sèche tous les pleurs sur mes seins triomphants,
Et fais rire les vieux du rire des enfants.
Je remplace, pour qui me voit nue et sans voiles,
La lune, le soleil, le ciel et les étoiles !
Je suis, mon cher savant, si docte aux voluptés,
Lorsque j'étouffe un homme en mes bras redoutés,
Ou lorsque j'abandonne aux morsures mon buste,
Timide et libertine, et fragile et robuste,
Que sur ces matelas qui se pâment d'émoi,
Les anges impuissants se damneraient pour moi !»

Ouand elle eut de mes os sucé toute la moelle,
Et que languissamment je me tournai vers elle
Pour lui rendre un baiser d'amour, je ne vis plus
Ou' une outre aux francs gluants, toute pleine de pus !
Je fermai les deux yeux, dans ma froide épouvante,
Et quand je les rouvris à la clarté vivante,
A mes côtés, au lieu du mannequin puissant
Qui semblait avoir fait provision de sang,
Tremblaient confusément des débris de squelette,
Oui d'eux-mêmes rendaient le cri d'une girouette
Ou d'une euseigne, au bout d'une tringle de fer,
Que balance le vent pendant les nuits d'hiver.

宇宙万物を無にした妖女は鳥ちやんだ。

影も形もない肉のあつたか味、

之を抱擁する心には底がない。

無題の詩の最後は、この詩句で終わっている。これは、“Les métamorphoses du Vampire.”の二聯目の冒頭の詩句、

Ouand elle eut de mes os sucé toute la moelle,

Et que languissamment je me tournai vers elle.

Pour lui rendre un baiser d'amour, je ne vis plus

Ou' une outre aux francs gluants, toute pleine de pus!

と同一の意識をもって書かれたものである。ボードレールの黒きヴェニウス(註16)は、ある時には赤髪の乞食女(註17)に、ある時には行きずりの女(註18)に、またある時にはこの『禁断詩篇』中の一編にみられるように吸血鬼に変貌し、彼の不断の苦悩、不断の歓喜の源となり、彼の内面においてはついにメタフィジックなものとなったのである。

泡鳴の「無言妖女」は、黒きヴェニウスに他ならない。この妖女は、宇宙万物を無と化し去り、奈落の眠りの中で、唯、影も形もない肉の暖か味だけを保っている。情愛のベレーを返そうと女の方に身を向けた時には、濃汁の一杯につまった、ぬらぬらする囊だけが残し、骸骨がばらばらになって散乱し、風見鶏のような音をたてている、吸血鬼の正体を見た詩人は、感嘆符によって、その驚愕、恐怖をあらわしている。

ところが泡鳴の方は、この詩の中で既に、無言妖女を抱擁する時、「之を抱擁する心には底がない。」とうたっている。無言妖女が例えどのような女であろうとも、どのような正体を見せても、「悪魔主義本尊ボードレル」を尊敬した、

この極東の詩人には、驚愕も恐怖もない。人間と人間、あるいは男と女との垣を取り去るのに、このような「奈落の眠り」の中にでも存在する、すべてを許容する精神は、ことに顕著である。

作品の中で、田村義雄は、妻を旧弊な女、自己のない女となじると、妻は、では清水鳥のような女が今様美人であると思うのかとやり返す。彼は即座にそれを否定する。

また彼は鳥に対する絶望、あるいは読者を意識した偽の絶望も持たず、ただ自我の発展を目指して、盲目的に生きていたわけではない。「発展」の「はしがき」に、田山花袋の泡鳴批判に論駁した、次のような箇所がある。

然し田山氏が『発展』には作者が『自分の感じたことが正当だといふ風に書いてある』と云ふに至つては、誣言も亦甚しい。多少そんな傾きがあつたと思ふ『放浪』にさへ、主人公の考へ若しくは感じのぐれ違ひや、無理に自己の哲理を成立させようとしたことなどが、立派に描き出してあるではないか？疑つて見れば、氏も多くの文学的職人肌の人々と同様、自身に思索上の煩悶や苦心を左ほどして来た経験ない為め、小説中に描かれた思索的で而も熱烈な人物の性格や心持ちを充分日本人的に呑み込めないのかとも思はれる。然らざれば、又氏の独断を非實際的に述べてゐるのだらう。

この詩人であり、哲学者であり、小説家であった男は、自分が「無理に自己の哲理を成立させようとしたこと」を知っている。彼に共鳴する人々は、彼がこの上ない卑俗な人間を描きながら、自分自身泥に塗れ、登場人物中、最も野卑な人間として自己を描いている点に魅かれるのである。^(註19)ダンテのように地獄へ赴くのではなく、地獄からやって来るボードレールに共鳴した泡鳴は、また、日本の土壌に築き上げた自己の哲理の脆弱さを知っていた。後年、日本主義に傾き、「古神道大義」などを著わす彼の思想の推移は、彼の作法のどの種類のものにも明かにされていない。彼を楽観的なドン・キホーテと見なすの

は従来の定説であるが、それは彼の作品の主人公の持つ一種の外向的人間の陽気さに眩惑されたためと、彼の特異な文体の奇妙に断定的な調子に捕えられたためではないであろうか。彼は一箇の苦行者であり、地獄の、暗黒の、無言妖女の魅惑を知る人間である。詩についてのみ述べれば、彼の同時代の詩人たちの、いわゆる「新しき詩歌の時」の到来を謳歌した、才気に満ち、希望に満ちた詩に比べ、彼の詩作品の傑れたものは例外なく、晦渋で苦悶に満ちている。労作「日本音韻論」が博士号を斥けられたのは、彼の品行に因るものであるという説は、ものの一面であろう。また「日本音律の研究」の博士論文としての当否はさておき、彼が詩人として、言葉について真剣に悩み、日本語の可能性を痛ましいまでに模索したことだけは、否定できない事実である。

「発展」は先に述べたように、五部作中では、発表順序は第3番目にあたりますが、作品に扱われたでき事としては、第1番目に当るものである。ところが奇妙なことに、泡鳴の詩作品との間の関連が最も深く、詩との間の臍帯が切れていない感があるのは、この作品が随一である。五部作中最も評判になり、偽版までも出たのは「放浪」であるが、^(註20)発売禁止の処分を受け、直ちに「文芸の発売禁止に関する建白書」を総理大臣西園寺公望、内務大臣原敬に送り、また『朝日新聞』に掲載するという騒ぎを惹き起したのは、「発展」である。また「田山氏の唯物的平面描写」に対抗して創り上げた「僕の肉霊合致的描写」を具体的に示す作品でもあった。^(註21)

先に挙げた無題の詩は、「発展」の中では第三番目に出て来るものである。最初の詩は、お鳥と親しくなった当初、鎌倉へ行こうと彼女を誘い、神奈川で降りて、浪打ち際を歩もうと浜辺をさがして焦りながら、空しく人工の狭い入り江のほとりを歩くに時思い出すという形式で出ている詩である。

義雄の第三詩集中の句

熱き真砂の上を撫でて

われは独りし物を思へば、

遠き深みの浪は打ちて、
手なる下より響き来たる。
おのが小胸も為めに振ひ、
千々の乱れは浜の小砂利。

渠は曾て自分が作ったかう云ふ浪漫的詩の而もこまやかだと思ふ心持ちを若い女と共に回復して見たいのである。この二三年来、渠は人生の殆ど素ツ裸な現実にあつてゐて、もとは何となく奥ゆかしさのあつた幻想など云ふものは全く消滅してしまつた生活をしてゐると考へると、やがて四十歳に近い新時代者の自分が哀れな様にも思はれて、迫めては若い女の熱い血に触れて、過ぎ去つた心の海の洋々たる響きを今一度取り返して見たいのである。

泡鳴の第3詩集は、「悲恋悲歌」である。先にも述べたような彼の詩の晦渋な趣は、自ら「苦悶詩」ととなえたところからも伺えよう。彼は海の深みから、また遙か遠くの外から打ち寄せるものであり、その深みへの、また遙か彼方の世界への思いによって、その胸は千々に思い乱れる。

“Les fleurs du mal.”の中の“Spleen et Idéal.”の中の第14番目の詩，“L’Homme et la Mer.”の第2詩句は、非常にこれに近い。

Tu te plais à plonger au sein de ton image ;
Tu l’embrasses des yeux et des bras, et ton cœur
Se distraît quelquefois de sa propre rumeur
Au bruit de cette plainte indomptable et sauvage.^(註22)

海は、homme libre にとっては、彼自身の姿を持つものであつた。しかし海と人間とは、互いに秘密を隠し合い、永遠に憎悪し合っている。“L’Homme et la Mer.”の最後にあるように、その姿は、“O lutteurs éternels, ô frères implacables !”と呼びかけるにふさわしいものである。

ボードレールは周知のように、その生涯を「悪の華」の彫琢に費した。言葉

の錬金術師と 仇名される 彼の放つ不滅の光芒は、この苦しみに 囚るものである。泡鳴の自ら唱える「苦悶詩」は、内容、形式ともにボードレールの苦悩に非常に近い。「悪魔主義の思想と文芸」の中で、泡鳴は、劉廷芝が、「年々歳々花相似たり、歳々年々人同じからず」の対句が欲しいばかりに、これを思い付いた友人を暗殺したという話を興味深いものとして取り上げている。これは「悪の華」に次ぐ詩集を“Les Paradis artificiels.”と名付け、この地上に人工の楽土を創造したボードレールの思想と一致するものである。

「発展」の中に出て来る第二の詩の断片は、次のような状況の中で書かれる設定になっている。塩山温泉で、原稿料が届かないところから、帰ることもならず室に閉じこもっていた義雄とお鳥の耳に、田の中の牛小屋から、牛共のいやな鳴き声が響いて来る。お鳥は、田圃が海ならば、あの牛が水牛だろうという。義雄は耳の病気に罹っていたので、蒸し暑さと水底の釣鐘のうなりのような耳鳴りと、現実の牛の絶え間ない鳴き声と、満足しない恋の恨みとを身一つに受けとめている。ただ毎夜、牛小屋の近くに、灯がひとつ、ぽつんと点るのを眺めるのが慰めとなっている。

恰も消えない露——日輪の光を昼間から一身に吸ひ込み、

目くらの夜を沢市の妻となる気だらう。

とかう、義雄は自分の詩に歌ひ込んだ。

然しその無言なのが一層寂しい。おれが若し優しい声でも出して呉れたらと渠が思つた時、何か求めるやうな牛の声がした。それを渠は今見詰めてゐた田の中のランプの出した湿っぽい声のやうに聴き為して、につこりした。

ランプと声、慰めと求めとが一つになつて、恋と不満とが合体の気分になつた時、渠はお鳥をそばに返り見て、自分の腹わたが煮えくり返るやうな熱情を取り押さへながら云つた。

『僕が若しつんぽになつたら、鳥ちゃんも僕の耳になつて呉れるだらう？』

『大丈夫だ、わ。』かの女は、義雄の書斎や家族などの写真が出てゐる雑誌

をいじくりながら、ただ曖昧な返事をした。

視覚を失くした沢市の妻とお鳥とを重ね合わせる彼の聴覚は、この時著しく損われていて、沈鐘の、きこえもしない響がひびいている。彼は「詩に歌ひ込んだ」文句は口にせず、自分の状況の通り、自分がつんぽになったら、耳になってくれるかとお鳥にたずねる。五官は交感し、視覚と聴覚との境界もおぼろな状態を創造し、交感の世界の秘密を覗かせる詩人の魔術を、泡鳴はここに、多少とも描いている。お鳥は捕われの女のようなもので、彼の「煮えくり返るやうな熱情を取り押へながら云」う言葉にもお座なりの返事を返すのみである。小説の中で、詩、もしくは他の小説を創作しながら、主人公が二つの世界に自由に出入できるという試み、20世紀の小説が大胆に行った試みを、彼は無造作にやってみせる。

どうやら東京に帰ることができ、義雄は自然主義の文学者たちの集りである竜土会の例会に出席する。秋夢、藤庵、花村なども出席しているが義雄は元気がなく、自殺した眉山や病死した独歩のことを考える。お鳥を住まわせている三畳の汚い部屋に戻った彼は、『吾人の頭脳は銀河に浴し、吾人の両足は地獄の床を踏む』というエマーソンの言葉を思い起す。彼自らは地獄の床を踏み破り、同時に天上においては須佐之男になりたいと考える。

折から熱に浮されているお鳥は、しきりに夢の中で死んだ母親を呼び、快樂の夢は、羽搏きして過ぎ去って行く。この時彼はその快樂の夢を、ポーのうたった「大鴉」の姿になぞらえてみる。

レノアと云ふ世になき乙女を恋して、

『あはれ、冴やかに吾れは覚ゆ寒き師走の夜中なり、

炭の燃えさし離れ離れ床にその影落としてき。

吾は頻りに朝を待ちつ、無駄に求めてわが書より

借らんとせしは憂さの晴らし』であつたところへ、『何を瘦せ魂、鄙び魂の

不吉怖鳥，古鳥』の鳥類か悪魔か分らないやうな真ッ黒な大鴉が闇の外から飛んで来て，書齋に備へつけられたパラス彫像の肩にとまつた。そして愛婦の今と同様ノーモア，『またもなし』と語つた。

それは失恋と云ふ物を地上に引き据ゑて見たのだが，英国の画家詩人ロセチの『昇天聖女』に，

『昇天聖女の身を傾けて
悠りしは黄金の天津横木。

眼は深みて，一しは，海の
平に静めるそれに勝り。

その手に持ちしは小百合を三個，
髪なるきら星数は七つ。』

とあるもの，つまり，これは失恋を天上に祭りあげたに過ぎない。

ワルツホイットマンにも同じ系統の『揺り籠から』があり，義雄自身にも長い詩篇『三界独自』中の『常盤の泉』があつて，矢ッ張り，若々しい恋の失敗を地上なり，天上なりに引き据ゑ，祭りあげてゐたのが思ひ出された。

この述懐は，これより数年後に刊行された「悪魔主義の思想と文芸」のノートといつてもよいものである。もちろんこの間には大正2年にアーサー・シモンズの論文“Symbolist movement in literature.”の翻訳，「表現派の文学運動」が出され，これが泡鳴自身に大きく影響していることは確実である。しかし，泡鳴がディアボリシズム及びその周辺の思想や文芸に興味を抱き，それが泡鳴の文学者としての成長に深く関わり合っていたことは，この「発展」の述懐によって証明されるのである。清水鳥と共に「地獄の床を踏む」田村義雄は，増田しも江と共に病の床に呻吟する泡鳴に他ならない。その「頭脳は銀河に浴」する時には，常にポーやロセッティと共に在ったのである。「放浪」の篇中人物として彼が説明する田村義雄は，「刹那主義の実行哲理家」であり，「発展」の篇中人物として彼が説明する田村義雄は，「思索的詩人」である。「発

展」の中に存在する詩作品，詩作品に関連するノート，評論のノートなどが，「放浪」の中には存在しないことを考えると，この篇中人物の説明に，作者の五部作設定の意図がうかがえるのである。

義雄もお鳥も，「こんな腐つたからだ，こんな死獣の体を借りたやうなからだ，こんな多くの悪病気の間屋をしてゐるやうなからだ」を持ち，苦痛に呻きながら，互いに罵り合っている。義雄は，この女をもう一度健康な身体にし，その上で自分を全身全霊をもって愛させたい，その後は自分が死ぬもよい，お鳥を破れ草屨を捨てるように捨ててもよいと考える。彼女は，「宿無し犬が掃き溜の汚物に飢をつなぐのと同様，ここは自分の苦痛の必然な餌じきを求めてゐるのだ。」と悟る。彼女は男の心臓や肺など，外には見えない肉体の部分から嚙り始め，遂には全身をむさぼり食ってしまうのでなかろうかと思う。

自分の恋も純潔でなければ，お鳥のも亦利害を混濁してゐると思ひ乍ら，ランプの光に獣性が目覚めて，二つの肉その物の腐爛して行く姿を見詰めてゐる。男の手足に女の存在を知らせるのは，渠がかの女に相分つた毒血のあつたかみである。

このまゝ死んで，腐つて，骨になつたら——『二つのしやりかうべ！』恨みもない，執着もない，全く関係のないあかの他人だと渠は考へた，そして，また他人の寝言は却つてはつきり聴えるものだとなれかが云つたことを。

この『二つのしやりかうべ！』(註23)は，彼の愕然とした気持ちをあらわしている言葉である。この語が何故，このように括弧入りで書かれたかということ，これは明治42年に『文章世界』に発表した「二のしやれかうべ」を，そのまま小説の中に再現したからである。「悪魔主義の思想と文芸」を出した同じ大正4年に，彼は第五詩集『恋のしやりかうべ』を金風社より出版し，この中の代表作のひとつに，「二のしやれかうべ」が収められているのである。彼の30代の

半ばから40代の初めにかけての数年は、ディアボリシズムへの傾倒と緊張とで、弦が張りつめられている感がある。この時期のほぼ中ほど、大正2年に出版された前述のシモンズの翻訳「表象派の文学運動」が、後世に与えた影響のもっとも大きいものであろう。

『恋のしやりかうべ』の「はしがき」で、彼はこう述べる。

無形律詩として口語の散文詩を書き初めたのは僕であつたと云つてもいい。が、この意味で僕のあとを追つて来たものは殆ど無かつた。ことさらに無形律を出さうとしても六ヶしいと見えてだ。僕もかかる散文詩を書き初めたと殆ど同時に、この散文詩の心持ちを小説に拡張出来ると考へて、創作の方面ではとうとう「詩界に別れる辞」まで書いて専ら小説に向ふやうになつてしまつた。僕に取つては、この明治四十一、二、三年頃の作を集めた第五詩集は詩と恋とのしやりかうべである。が、その当時僕がおのづからに活躍させた日本語の無形の音律に添つてこれを読んで呉れる読者が少しでもあらば、僕の本望はこれに過ぎないのである。

彼は「この散文詩の心持ちを小説に拡張」して、読者に示す。先の大正2年発表のシモンズの翻訳を彼のディアボリシズム時代の頂点と述べたが、彼の創作でいえば、その前年、明治45年7月出版の「発展」が頂点に当たるといえよう。泡鳴の「散文詩」の読者は、泡鳴の転身につれて小説の読者となり、「日本語の無形の音律に添つて」読んだ詩の世界を、再び見たのである。次に「二のしやりかうべ」の後半を挙げてみる。

『しーちゃん、しーちゃん、』と、静かに 呼んで 見たが、
覚めようとも しない。
僕も考へた、呼び起して 苦痛に 返すよりも、
死ぬまで かうして ゐさせる 方が まだしも 功德だ。

早く 出来た 子なら、
僕には 総領娘 ぐらゐに 当る 若さだ、
無病 息災で あつた きのふは、
だだを 捏た ことも ある、
泣いて 無理を 云つた ことも思ひ出される。

そして 今や、
ただ その 衰弱と 狂妄との 喰ひ物に
僕を 引きつけて 置くの かも 知れない。
過ぎ去つた 快樂は
現在の 僕を 満足させるに 足りない——
執着は もはや 愛で なく、
僕も 亦 自分の 苦痛の 餌をば 求めて めたの かも知れない。

ランプの 光に 獣性の目覚め、
(それも やがて 肉 その物の 腐爛に 包まれて 行くのだらう。)

僕の 手足に 女の 存在を 知らせるのは、
既に 僕の 病毒を 多く 運ぶ
その 悪血の あつたかみ ばかりだ。

兄弟を 棄てた 女、
妻子を 離れた 男、
(ふたりの 間は もとの 他人だ。)

明き屋 同前の 二階、
燃える ままの 光、

(すすけた 肉は 腐つて 行く。)

快樂のほとぼりが なくなるに 従つて、どうせ 死んでしまう 僕等、
苦痛の 中の 快樂も なくなれば) 一層 強い 死だ。

ただ それまでの 連続——刹那の衰頹——

時計の 音の 刻 一刻は、
二つの しやりかうべを 並べて 刻むのだ。

抱き合つた 寢床の うち、
互ひの 口は
天井に 向つて 白い 息を 吐き出して ゐる。!

快樂と死の 結びつき、抗い難い時 に対する人間の闘い、その問いの空しさを、この詩は適確に表現している。ディアボリシズムの洗礼を受けなければ、それはこのような形をもってしては、あらわれなかったものである。ボードレールの時にたいする闘いを、これほど自己のものとして受け止めた文学者はいない。「二のしやりかうべ」の後半の部分と、“Les fleurs du mal.” 中の “Spleen et idéal.” の中の第29番目の詩、“Une charogne.” の後半の部分は、まさに血を分けあつたきょうだいといえよう。

——Et pourtant vous serez semblable à cette ordure,

A cette horrible infection,

Etoile de mes yeux, soleil de ma nature,

Vous, mon ange et ma passion!

Oui ! telle vous serez, ô la reine des grâces,
Après les derniers sacrements,
Quand vous irez, sous l'herbe et les floraisons grasses,
Moisir parmi les ossements.

Alors, ô ma beauté ! dites à la vermine
Oui vous mangera de baisers,
Que j'ai gardé la forme et l'essence divine
De mes amours décomposés !

ボードレールの快樂と死と永遠に流れ続ける時間とを結合する、「悪の華」を一貫する主題は、泡鳴の言葉でいえば、「詩と恋とのしやりかうべ」なのである。

ディアボリシズムに対する泡鳴の関心が一段と高まる時期より2年ばかり前、明治39年6月、左久良書房から出版された「神秘的半獣主義」は、最も人口に膾炙した論文であろう。刹那主義哲学の聖書、自然主義作家の自己擁護論として、興味を持たれたわけである。この中の「刹那的文芸観」という章の中で、泡鳴は次のように述べている。

哲学は老ひ易い、宗教は枯れ勝ちである、
独り、文芸はとこしなへに若やいでゐる。

自らを哲学者、宗教家、文学者と称した泡鳴は、結局は永遠の青春を持つ文学の道に殉じた人物であった。泡鳴をドン・キホーテに例える従来の議論を否定することはできない。しかし、文学上の人間典型に例えるとすれば、泡鳴はむしろ、ボードレールが生んだ最も近代的なドン・ジュアンの姿にこそ例えられるべきである。貞淑な妻、誠実な従者、純情な商人たち、縁者たちの歎きを

よそに、自分が殺した恋人の父の石像（その石像に自分も殺されたのであるが。）を水先案内人として、三途の河を舟で下って行く。“Les fleurs du Mal.”の中の“Spleen et idéal.”の中の第15番目の詩，“Don Juan aux Enfers.”の終章は、次のようなものである。

Tout droit dans son armure, un grand homme de pierre
Se tenait à la barre et coupait le flot noir ;
Mais le calme héros, courbé sur sa rapière,
Regardait le sillage et ne daignait rien voir.

泡鳴の詩作品には、これと類似のものは見当たらないが、その足跡は、まさにボードレールのドン・ジュアンをわが国において具現するものであったと言える。

註1：大正4年2月、天弦堂より刊行された「悪魔主義の思想と文芸」中の言葉。『桃山学院大学人文科学研究第8巻第1・2号合併号』中の拙論「岩野泡鳴におけるディエゴ・リシズムの影響——『悪魔主義の思想と文芸』を中心として——」参照。

註2・註3・註4：同じく「悪魔主義の思想と文芸」中の表現。

註5：明治39年、左久良書房より刊行された「神秘的半獣主義」の中の第18番目の項目、「半獣主義の神体」よりの引用。

註6：中村光夫「二葉亭四迷伝」参照。

註7：「毒薬を飲む女」は、大正3年6月『中央公論』に発表されたもの。はじめ「未練」と題されていたが、滝田樗陰の意見で改題され「毒薬女」となり、再度改題されて「毒薬を飲む女」となった。

註8：幸は翌29年11月入籍される。同月、長女喜代誕生の故である。

註9：明治43年7月、東雲堂より書き下し出版。大正8年7月改訂出版。

註10：明治44年1月1日より3月16日まで60回分が『毎日電報』と『東京日日新聞』に連載される。

註11：明治44年12月16日から『大阪新報』に100回連載。45年実業之世界社から単行本として刊行。

註12：大正3年6月『中央公論』に発表。

註13：「断橋」の最後の部分、「寝雪」，「川本氏」，「憑き物」を併せて改訂したもの。
大正9年5月出版。

註14：第3詩集『悲恋悲歌』中の詩，「闇の横木」の冒頭の詩句もまた有名なものであるが，それは次のようなものである。

ああ，日は毛布の黒みを帯びて，

月また血のごとしぼみ来たり，

あめなる星々その軸もろく，

たとへば無花果地にぞ落つる。

註15：ここに取り上げた「発展」の中の無題の詩は，大正4年金風社より出版された第5詩集，『恋のしやりかうべ』の中に，「甲州の印象」と題する詩の一部として書き直され，収録されている。内的には，『闇の盃盤』との血縁関係があると見なしたい。

註16：1842年，ボードレールは前年，21歳の時に会った混血の女優，ジャンヌ・デュヴェルを，こう呼び，同棲する。彼は彼女のためにこの年，はやくも父親から受け継いだ巨額の遺産を蕩尽し，このため翌年には，準禁治産者と認定された。

註17：“Les fleurs du mal.”中の“Tableaux Parisiens.”中の第三番目の詩は“A une mandiante rousse.”と題されている。

註18：同じく“Tableaux Parisiens.”の中の第8番の詩は，“A une passante.”と題されている。

註19：正宗白鳥の書いた評論「岩野泡鳴」などがその典型である。

註20：大正元年，博盛堂から「我身の罪」と題して出版されたが，泡鳴は直ちに訴訟をおこし，絶版にさせた。

註21：「発展」の序文によれば，泡鳴は「小説の表現法に四段階ある。」と考え，1.説明的説明（最も古いもの），2説明的描写（藤村の概念的描写が例），3.描写的説明（花袋の唯物的平面描写が例），4.肉霊合致的描写（泡鳴自身が例）であると述べる。

註22：この詩は1852年10月，「パリ評論」に発表されたもので，発表当初は，「自由人と海」と題されていた。

註23：泡鳴の癖で，小説作品の中の会話はすべて二重の鍵括弧に入っている。これはそのままを採ったものである。また「発展」の中では『二つのしやりかうべ』となっているものは，『恋のしやりかうべ』の中には，「二のしやりかうべ」という題で収められている。